

## 第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

形見

京都府 龍谷大学付属平安中学校 三学年

富士田 遥花

私には姉が一人いた。元気な私とは違い、大人しい人だった。勉強もできて優しい姉は、私にとってまさにお手本のような見習うべき人間だった。そんな姉が、私の前からいなくなるなんて想像もできなかった。

私が八歳の頃、激しい雨の日だった。姉はおつかいの帰り道。ザーザーと降り注ぐ雨で、車が来たことに気づかず、そのまま轢かれてしまった。車に乗っていた人が救急車を呼び、病院に搬送されたが、すぐに息を引き取ってしまった。

姉の死後、私たちの家は常に暗い家になっていた。両親は仕事も手につかず、私も笑うことが少なくなっていた。そんな中、姉の死去により保険金を受け取った。確かにこのお金のおかげで、我が家はほんの少しだけお金が増えた。でも私たち家族は誰一人として笑わなかったし、「お金が増えた。」という喜びも一切無かった。むしろ、『私の姉はこんなちよつとのお金の分しか価値が無いのか。』と怒りが込み上げてきた。『お金はいらない。姉を返せ。』と心の中で叫んでいた。そんなことを言っても、絶対に姉は帰ってこない。分かっているからこそ、怒りが込み上げてきた。

そんな頃、私はインターネット上で知り合ったAさんと毎日会話をしていた。Aさんも小さい頃、弟を亡くし、つらい思いをしたという。私はAさんだけが私の気持ちを分かってくれると思っていた。いつも通り、Aさんと話していると、Aさんが急に「保険って大切だよね。」と打ってきた。私はそのAさんの言葉に怒りを感じた。私はすぐに、「亡くなった弟とお金どっちが大事なの？」と打った。そしたらすぐに、「そんなの弟に決まってるでしょ。」と返信がきた。「じゃあ、なんで。」と打つと、長文の返信が返ってきた。文には、「弟が死んだことを後悔しても遅い。だってもう弟が帰ってくることは絶対に無いんだから。」と書いてあった。Aさんの言葉で私は気づかされた。今更姉のことを悔やんだって姉は帰ってこない。だったら姉の分まで生きていこうと思った。

Aさんの返信メールの最後に、こんな文があった。

## 第55回中学生作文コンクール

「生命保険は、弟がこれからの人生で両親に親孝行するはずだったお金を前払いしたものだと思う。このお金は、ある意味、弟の形見なんじゃないかな。」と話していた。

Aさんはどこの誰かも分からない。でもAさんのおかげで私は心が強くなれた。私はいつまでも力強く生きる。姉の形見とともに。